保健管理センター

1　構 成 員

	平成16年3月31日現在
教授	0人
助教授	0人
講師（うち病院籍）	1人　（　0人）
助手（うち病院籍）	0人　（　0人）
医員	0人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	0人　（　0人）
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技官（教務職員を含む）	1人
その他（技術補佐員等）	2人
合　　計	4人

2　教官の異動状況

永田勝太郎（講師）（H3. 2. 1～現職）

3　研究業績

数字は小数2位まで。

	平成15年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	11編　（　9編）
そのインパクトファクターの合計	0
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	9編　（　8編）
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	5編　（　5編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	4編　（　4編）
そのインパクトファクターの合計	0

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 永田勝太郎：慢性腰痛患者に対する実存分析の精神内分泌学的検討，精神神経学雑誌105(4)：459-467，2003.
2. 永田勝太郎，本多和雄：起立性低血圧の新分類とcoenzymeQ10の治療薬としての可能性，New Food Industry 2004 46(5)，2004.

3. 永田勝太郎：実存分析的アプローチを含めた包括的方法（全人的医療）による癌患者のケア，痛みと漢方13：22-26，2003.
4. Nagata K：Comprehensive medicine based on whole person medicine -The role of Traditional Oriental Medicine- Summary of the lecture in Hebrew university school of medicine, Israel, Comprehensive Medeicine (1)：57-61，2003.
5. Nagata K, Okano K, Hasegawa T, Ohtsuki C：The evaluation of comprehensive treatments of low back pain patients by 17-KS-S and 17-OHCS, Comprehensive Medeicine 5(1)：62-67，2003.
6. 永田勝太郎，糟谷修子，林　秀晴：本能性低血圧と過敏性腸症候群（IBS）の合併について，CAMPUS HEALTH，41(1)：171，2004.
7. 永田勝太郎，糟谷修子，中村浩淑，店村眞知子：音楽療法の生理的効果，浜松医科大学保健管理センター年報第9号(平成13・14年度合併)：86-89，2003.9.30.
8. 永田勝太郎，糟谷修子，中村浩淑：行動療法と実存分析学を組み合わせた神経性食欲不振症の治療，浜松医科大学保健管理センター年報第9号(平成13・14年度合併)：90-92，2003.9.30.
9. 糟谷修子，永田勝太郎，中村浩淑：保健管理研究に関する一考察 ― 保健管理研究集会における看護職の研究への取り組み ―，浜松医科大学保健管理センター年報第9号(平成13・14年度合併)：98-100，2003.9.30.

インパクトファクターの小計　［0.00］

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1. 店村眞知子，永田勝太郎，大槻千佳：音楽療法による精神生理学的効果の研究，精神神経学雑誌105(4)：468-472，2003.
2. 志村則夫，永田勝太郎，畠山隆信，西山佳秀，杉浦　剛：いのちを育てる医療 ― 健康の創造と自己組織化 ―，精神神経学雑誌105(4)：448-458，2003.

インパクトファクターの小計　［0.00］

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

(3) 総　　説

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 永田勝太郎：見えない病気「低血圧」と「その関連疾患」，メディカル朝日32(6)：64-65，2003.
2. 永田勝太郎：いわゆるむち打ち症など交通事故関連の病態について，Modern Physician 23(4)：560-561，2003.
3. 永田勝太郎：現代医学と漢方方剤の併用，Modern Physician 23(4)：570-571，2003.
4. 永田勝太郎：慢性疼痛，医学と薬学49(5)：661-666，2003.
5. 永田勝太郎，長谷川拓也，岡野　寛，大槻千佳，広門靖正，青山幸生，白畠　庸：慢性疼痛への代替医療の貢献 ― 代替医療から補完医療・全人的医療への展開 ―，慢性疼痛22(1)：55-60，2003.
6. 永田勝太郎：全人的医療と鍼灸マッサージ ― 全人的医療における医療者の態度とコミュニケーション ―，第28回日本東洋医学系物理療法学会誌28：3-7，2003.
7. *永田勝太郎*：Salutogenesis（健康創成論）とメンタルヘルス ― 新しいパラダイムの展開 ―，日本精神衛生会雑誌　心と社会34(4)：10-15，2003.

インパクトファクターの小計　［0.00］

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1. 武田文和，永田勝太郎，金子　隆，安斎圭一，星野惠津夫：緩和ケアと漢方，漢方医学27(2)：48-57，2003.
2. Singh A. N., Nagata K：Current advances of psychopharmacology in disorders -W. H. O. lecture series, Comprehensive Medicine 5 (1)：45-51，2003.

インパクトファクターの小計　［0.00］

(4) 著　　書

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 永田勝太郎：コエンザイムQ10の魅力 ― 神様の贈り物 ―，pp.1-363．佐久書房，東京，2003.
2. 永田勝太郎：コエンザイムQ10で元気力アップ，別冊家庭画報：pp.1-64，世界文化社，東京，2004.
3. 永田勝太郎：口腔内に病変の認められない難治性慢性舌痛の1例，ほんとうに困った症例集「心療内科編」(久保木富房編集)，こころの臨床22増刊号(4)：70-71，星和書店，東京，2003.
4. 永田勝太郎：詐病の診断に苦慮した交通事故後遺症の1例，ほんとうに困った症例集「心療内科編」(久保木富房編集)，こころの臨床22増刊号(4)：173-175，星和書店，東京，2003.
5. 永田勝太郎：慢性疼痛患者の評価，痛み ― 基礎・診断・治療 ―（花岡一雄編集)，pp.73-82，朝倉書店，東京，2003.

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

(5) 症例報告

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 永田勝太郎，長谷川拓也，岡野　寛，大槻千佳，広門靖正：伝統的東洋医学を基盤に心身医学を駆使して治療した神経性食欲不振症の1例，― 行動療法と実存分析学を組み合わせた神経性食欲不振症の治療 ―，日本東洋心身医学研究18(1/2)：53-57，2004.
2. 永田勝太郎，森下克也，岡野　寛，長谷川拓也，大槻千佳：11年間引きこもった慢性疼痛患者の実存心身療法，心身医学43(5)：284，2003.

インパクトファクターの小計　［0.00］

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. 森下克也，永田勝太郎，岡野　寛：ラクツロースへの依存傾向を示した過敏性腸症候群の1例，心身医学43(5)：285，2003.

インパクトファクターの小計　［0.00］

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1. 森下克也，永田勝太郎，岡野　寛：ラクツロースへの依存傾向を示した過敏性腸症候群の1例，心身医学43(5)：285，2003

インパクトファクターの小計　［0.00］

4　特許等の出願状況

	平成15年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5　医学研究費取得状況

	平成15年度
(1) 文部科学省科学研究費	0件　（　0万円）
(2) 厚生科学研究費	0件　（　0万円）
(3) 他政府機関による研究助成	0件　（　0万円）
(4) 財団助成金	0件　（　0万円）
(5) 受託研究または共同研究	0件　（　0万円）
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	6件　（700万円）

(5) 受託研究または共同研究

永田勝太郎（株）信田缶詰，（株）フェリックなど　700万円

6　特定研究などの大型プロジェクトの代表，総括

7　学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	13件
(2) シンポジウム発表数	0件	4件
(3) 学会座長回数	0件	8件
(4) 学会開催回数	0件	3件
(5) 学会役員等回数	9件	28件
(6) 一般演題発表数	0件	

(2) 国内学会の開催・参加

1) 主催した学会名

1. 永田勝太郎：第10回日本実存療法学会，東京，2003.3.
2. 永田勝太郎：第10回こころとからだの痛み研究会開催，東京，2003.6.
3. 永田勝太郎：第3回静岡不眠症研究会開催，三島，2003.9.

2) 学会における特別講演・招待講演

1. 永田勝太郎，現場でハートをどうつかむか，全日本鍼灸学会神奈川地方会定例研究会，横浜市，2003.4.
2. 永田勝太郎，全人的医療；こころを癒し，からだを癒す，東京医科大学霞ケ浦病院特別講演，霞ケ浦，2003.6.
3. 永田勝太郎，（特別講演）癌の自然退縮の最新研究，第22回全日本鍼灸学会関東甲信越支部学術集会，東京，2003.9.
4. 永田勝太郎，新しい時代のコミュニケーション，平成15年度第2回浜松市歯科医師会学会，浜松市，2003.10..
5. 永田勝太郎，治療的自我 ― 医師の態度と医療への効果，第4回海仁眼学会，浜松市，2003.10.
6. 永田勝太郎，全人的医療の実践 ― OTCカウンセリング ―，日本紅蔘研究会，福岡市，2003.10.
7. 永田勝太郎，東洋医学と健康創成論，全日本鍼灸学会静岡地方会15年度第3回例会，静岡市，2003.12.14.
8. 永田勝太郎，心身医学の最良の場としての鍼灸マッサージ：サルートジェネス（Salutogenesis; 健康創成論）と伝統的東洋医学，日本東洋医学系物理療法学会第29回学術大会，郡山市，2003.10.
9. 永田勝太郎，人間の生と死をどうとらえるか，浜松セルフの会20周年記念公開講座，浜松市，2003.11.

10. 永田勝太郎，鍼灸治療におけるsalutogenesis（健康創成論）とpathogenesis（病因追及論），第23回全日本鍼灸学会東海支部学術集会，静岡市，2003.12.
11. 永田勝太郎，（特別講演）Salutogenesis（健康創成論）と実存，第10回日本実存療法学会，東京，2004.3.
13. 永田勝太郎，Salutogenesis（健康創成論）と実存療法，第1回医療と健康と福祉を考える会，日本実存療法学会共催，名古屋，2004.3.

3）シンポジウム発表

1. 永田勝太郎，長谷川拓也，岡野　寛，大槻千佳：患者の自律性に従った癌治療 ― 手術拒否の肺癌の1例 ―，第16回日本疼痛漢方研究会，8月，東京
2. 永田勝太郎：東洋医学におけるストレスと臨床化学：salutogenesis 論から，第43回日本臨床化学会年会・第50回日本臨床検査医学会総会連合大会，10月，広島
3. 広門靖正，永田勝太郎，岡野　寛，長谷川拓也，大槻千佳，喜山克彦，包　隆穂：全人的医療における鍼灸手技療法の役割，第10回日本実存療法学会，3月，東京
4. 長谷川拓也，岡野　寛，永田勝太郎，喜山克彦，大槻千佳，包　隆穂，広門靖正：十二指腸乳頭癌の肺転移例の実存的転換，第10回日本実存療法学会，3月，東京

4）座長をした学会名

1. 永田勝太郎：（一般演題座長），第51回日本心身医学会中部地方会，4月，名古屋
2. 永田勝太郎：（特別講演座長）Singh A. N.，The future of ACPM, 第44回日本心身医学会，5月，那覇
3. 永田勝太郎：（一般演題座長）第16回日本疼痛漢方研究会，8月，東京
4. 永田勝太郎：（教育講演座長）Singh A.N., Current advances of psychopharmacology in psychosomatic disorders，第44回日本心身医学会，5月，那覇
5. 永田勝太郎：（一般演題座長）日本健康科学学会第19回学術大会，7月，京都
6. 永田勝太郎：（招聘講演座長）Day SB教授　第10回日本実存療法学会
7. 永田勝太郎：（特別講演座長）Stacey B. Day，統合医療とQOL，第1回医療と健康と福祉を考える会，日本実存療法学会共催，名古屋，2004.3.29.
8. 永田勝太郎：（一般演題座長）第33回日本慢性疼痛学会，　3月，東京

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

国内　理事・代表など

永田勝太郎，日本実存療法学会　理事長

永田勝太郎，日本於血学会　理事　副会長

永田勝太郎，日本血行動態研究会　世話人代表

永田勝太郎，こころとからだの痛みの研究会　世話人代表

永田勝太郎，日本行動医学会　理事

永田勝太郎，日本慢性疼痛学会　常任理事，編集委員

永田勝太郎，日本疼痛漢方研究会　常任理事
永田勝太郎，日本心身医学協会　理事
永田勝太郎，日本バリント式保健医療協会　事務局長
永田勝太郎，日本東洋療法試験財団　理事
永田勝太郎，日本尊厳死協会　理事
永田勝太郎，日本教育臨床研究会　顧問

国内　評議員など

永田勝太郎，日本心身医学会　評議員
永田勝太郎，日本自律神経学会　評議員
永田勝太郎，日本保健医療行動科学学会　評議員
永田勝太郎，日本プライマリ・ケア学会　評議員
永田勝太郎，日本レーザー治療学会　評議員
永田勝太郎，日本疼痛学会　評議員
永田勝太郎，日本歯科心身医学会　評議員
永田勝太郎，日本ストレス学会　評議員
永田勝太郎，日本医学教育学会　評議員
永田勝太郎，日本健康科学学会　評議員

専門医・指導医

永田勝太郎，日本心身医学会　研修指導医・認定医
永田勝太郎，日本東洋医学会　指導医・専門医
永田勝太郎，日本内科学会　認定内科医
永田勝太郎，日本温泉気候物理医学会　認定温泉医
永田勝太郎，日本プライマリ・ケア学会　指導医・認定医
永田勝太郎，麻酔科　標榜医

国際

永田勝太郎，Albert Schweitzer World Academy of Medicine　副総裁
永田勝太郎，International Study Board of Comprehensive Medicine　代表
永田勝太郎，中国心理衛生協会（Beijing）名誉理事
永田勝太郎，International Balint Documentation Center　名誉会員
永田勝太郎，Institute of Viktor Frankl　理事，編集委員
永田勝太郎，Polish Academy of Medicine　名誉会員
永田勝太郎，International Hippocratic Foundation of Kos　名誉会員
永田勝太郎，International Institute of Universalistic Medicine　名誉顧問
永田勝太郎，International Foundation of Bio-Psycho-Social Health　理事

8　学術雑誌の編集への貢献

	国　内	外　国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	1件	1件

(1) 国内の英文雑誌の編集

1. 永田勝太郎，Comprehensive Medicine，日本実存心身療法研究会，日本バリント式保健医療協会，日本血行動態研究会，編集主幹，登録なし，IFなし。

(2) 外国の学術雑誌の編集

永田勝太郎，Journal of Viktor Frankl Institute Editorial Board，登録なし，IFなし。

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

永田勝太郎，Journal of Viktor Frankl Institute Editorial Board，1 Austria

9　共同研究の実施状況

	平成15年度
(1) 国際共同研究	7件
(2) 国内共同研究	7件
(3) 学内共同研究	0件

(1) 国際共同研究

1. Boris Luban-Plozza（ハイデルベルグ大学）バリント法による面接技法ないしグループワークの運営方法の開発研究，QOL（Quality of Life）の客観的測定・評価方法の開発研究
2. Day, S.（WHO，ニューヨーク大学）全人的医療モデルに関する国際的合意，現代医学，伝統的東洋医学，心身医学の相互主体的鼎立に関する研究
3. Alexander Vesely（ウイーン大学）ロゴセラピー（実存分析）の臨床的応用に関する研究
4. Imielinski, K.（ワルシャワ大学）医療におけるヒューマニティの研究
5. Hampf, G.（ヘルシンキ大学）慢性疼痛患者への全人的アプローチの方法論の研究
6. Singh, A.（クイーン大学）心身医学と東洋医学の相互主体的両立,および精神薬理学に関する研究，WPA（世界精神医学会）などでWHOシンポジウムを共催
7. Ye Qi（日中友好医院）心身医学と東洋医学の両立に関する研究

(2) 国内共同研究

1. 国立精神神経センター　神経性食思異常症の遺伝子研究
2. 志村則夫（東京医科歯科大学歯学部）全人的医療に関する研究，WPA（世界精神医学会）などでWHOシンポジウムを共催
3. 店村眞知子（聖隷クリストファー大学）音楽療法の精神生理学的研究，WPA（世界精神医学会）などでWHOシンポジウムを共催
4. 古谷悦子（北海道大学歯学部）17-KS-S, 17-OHCSを用いたストレス状態の計測法の開発の研究
5. 本多和夫（鳥取大学医学部）起立性低血圧の血行動態学的研究，ならびにQOLに対する影響の研究
6. 村山良介・青山幸生（東邦大学医学部）慢性疼痛患者への全人的アプローチの研究

7. 白畠　庸（東邦大学医学部）鍼治療の科学的評価の研究

10　産学共同研究

	平成15年度
産学共同研究	1件

1. 永田勝太郎，三菱化学殿共同研究，コエンザイムQ10の血中濃度の測定法ならびにその評価に関する研究

11　受　　賞

12　研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 全人的医療モデルに関する国際的合意，現代医学，伝統的東洋医学，心身医学の相互主体的鼎立に関する研究 ― Antonovski Aによるsalutogenesis（健康創成論）の導入モデルの考案

全人的医療は今後の世界の医療に取り，重要なテーマであるが，その具体的方法論は目下，模索中である。我々はDay, S.の唱えた全人的医療モデルであるbio-psycho-social modelに加え，人間の実存性に根ざしたexistentialな視点を導入し，bio-psycho-social-existential modelを国際的に提唱してきた。また，その実践のためには現代医学（慣行医学），伝統的東洋医学，心身医学の鼎立が必須である。その相互主体的鼎立のための具体的方法論，評価法の検討を行っている。また，バリント・グループなどを通じ，医学教育にも貢献してきた。

我々はAntonovski A のsalutogenesis（健康創成論）に注目し，SOC（sense of coherence，人生の志向性）と実存性についての考察を加えた。また，臨床検査による評価として17-KS-S，17-OHCSによる方法との関連性について明確な結論を得た。

2. 尿中17-KS-S, 17-OHCSを用いたストレス状態の計測法の開発の研究

Selye, H.により提唱されたgeneral adaptation syndromeに基づき，生体（ヒト）の受けるストレスの度合いと，それに対する生体の抵抗性についての科学的評価を，尿中17-KS-S, 17-OHCSを用い，検討してきた。17-KS-Sの前駆物質であるDHEA-S（dehydroepiandrosterone sulfate）は，anti-cortisolとして国際的に再認識されつつある。現在，さまざまなストレス状態におけるこれらの値を検討しているが，癌末期では17-KS-Sが低値を，17-OHCSは高値を呈することが明確になった。神経性食欲不振症や鎮痛剤中毒患者では，病態に応じて，両者が低値を呈することが明らかになってきている。DHEA-Sや17-KS-Sについては国際学会が誕生し，我々も参加している。各種補剤や心理療法の17-KS-S，17-OHCSによる評価を行っている。

緩和医療における17-KS-S，17-OHCSについて検討した。さらに緩和医療における補剤の使用，実存分析的治療の効果について評価した。癌の自然退縮の条件，実存的転換の条件について検討を行った。

3. 非侵襲的血行動態測定方法に関する研究

起立性低血圧などにおける血行動態学的研究は機能的病態に対する積極的な評価法である。我々

はSchellongの起立試験に伴う血行動態反応を検討してきたが，この方法が各種疾患に特異的な反応を呈することから，本法の臨床的活用の一般化が求められてきている。難治性アトピー性皮膚炎，慢性疼痛などでその特異的反応パターンが確認されてきている。

集積した約2万件のSchellongの起立試験に伴う血行動態反応の非侵襲的測定を整理している。また，加圧脈波測定機器の開発も行っている。

4. 慢性疼痛に関する全人的医療の方法論の開発

著しくQOLを低下させる慢性疼痛に悩む患者は多く，反射性交換神経性萎縮症（RSD）はよく医療裁判にもなる疾患である。一方，慢性疼痛は全人的医療モデルを容易に駆使できる疾患でもある。身体・心理・社会・実存的に多面的に患者を理解することが求められる。また，血行動態不良症候群や17-KS-Sなども関与する生体の包括的なhomeostasisの破綻がその基礎にある。その評価，ならびに治療への貢献は重要な医療上の問題である。国際疼痛学会，日本慢性疼痛学会，日本疼痛学会，こころと身体の痛みの研究会，疼痛漢方研究会など通じて，その成果を発表してきた。

Salutogenesis（健康創成論）を慢性疼痛治療に導入し，17-KS-S，17-OHCSによる疼痛評価を行った。さらに心拍数変動による自律神経系の機能評価を行った。

5. 伝統的東洋医学の科学的評価

漢方方剤，鍼灸などの方法は今日，アジアだけのものではなく，国際的になった（相補代替医療）。その科学的評価が大きくなされつつある。我々は循環器学的方法や，神経内分泌学的方法を用いて，積極的に評価してきている。鍼の作用機序，漢方方剤の生体への影響の評価などが徐々に解明されつつある。証の科学的評価の試みを行っている。

6. 実存分析を基礎にした実存心身療法の開発の研究

心理療法は多々あるが，人間の実存性に則った logotherapyは体験療法としてもっとも重要な意味を持つ。我々は神経性食欲不振症やRSDなどの難治性の疾患を有する患者に本法を用い，成果を挙げている。また，こうした心理療法の生物学的評価，つまり精神神経内分泌学的方法による評価が開発された。

実存分析を中心とした実存療法は単なる心理療法ではなく，脳のDHEA-Sの分泌を促進させる身体的・精神的な統合療法であることが明確になってきた。

7. Serum CoQ10 levelの測定と血行動態への影響

coenzyme Q10は近年注目されてきた生体内活性物質である。その不足は心機能に影響を及ぼすが，まだ未知の部分も多い。HPLC法による測定，臨床症状との関連について検討している。

8. undenatured Type 1 collagenのホルモン産生作用の研究

海洋性undenatured Type 1 collagen骨粗鬆症に有効であることは周知されているがそれに17-KS-S産生作用があることが示唆される症例に遭遇する。その臨床的研究を行っている。

9. 音楽療法のハード，ソフト面における開発と評価

音楽療法のハード，ソフトの開発を患者の個別生を尊重しながら選択できるようにするため，行ってきた。また，その客観的評価を精神生理学的方法で行ってきた。成果は世界精神医学会，日本心身医学会などで発表してきた。

NHK交響楽団の協力を得て，プロ音楽家の音楽嗜好性，生理反応を検討した。

10. 心理療法の比較検討

心理療法は瀉法なのか，補法なのかAT（自律訓練法）などを血行動態，精神内分泌，自律神経評価を用いながら行う。

13　この期間中の特筆すべき業績，新技術の開発

1. 音楽療法ソフトウエアの開発
2. 心理療法の精神生理学的評価
3. コロトコフ音図（KSG）の評価
4. 加圧脈波機器の開発
5. Undenatured Type 1 collagenのホルモン産生作用

14　研究の独創性，国際性，継続性，応用性

1. 全人的医療モデルは我々独自のモデルであるが，国際的に容認されてきている。また，伝統的東洋医学も全人的医療の文脈の中で，心身医学的アプローチをinterfaceにしながらその効果を発揮できることは国際的に合意に至っている（相補代替医療の進展）。その評価法法として非侵襲的血行動態の測定法や，17-KS-S，17-OHCSの測定，心拍数変動による自律神経評価などは新しい医学の方法として国際的にクローズアップされてきている。また，医学教育の面からもこうした全人的医療の方法論は重要で，WHOもスピリチュアル・ケアとして推奨してきている。方法論の評価法について開発してきた。

2. 全人的医療の実現にはpathogenesis（病因追及論）なモデルのみでは問題解決しない。Salutogenesis（健康創成論）なモデルの導入が必須である。そこに伝統的東洋医学が導入できる（統合医療）。また，心身医学は心身一元論によりこのモデルに導入できる。新しいモデルはパラダイムシフトである。

15　新聞，雑誌等による報道

1. 永田勝太郎，コエンザイムQ10　がん末期に成果，岐阜新聞朝刊：10，2003.6.2.
2. 永田勝太郎，すこやかな生活のために，よりよい睡眠を，静岡新聞社市民公開講座（静岡市，浜松市開催），静岡新聞朝刊：20，2003.9.21.
3. 永田勝太郎，コエンザイムQに抗酸化作用，健康補助食品で注目，イワシなどに含まれる老化防止効果も，静岡新聞夕刊：5，2003.9.22.